

英語における **Phonetic Symbolism** について

寮 金 吉

1

「ポンポンと蒸気船がすぎてゆく」 「ちちと鳥が鳴く」

これは音をコトバで示そうとしているのである。

「淙々と水の流れるあゆのいて」

これは水の流れる音が淙々としているとみるより、感じとる気持をコトバで写そうとしているのであろう。いわゆる *state of mind* を表わそうとしている。だから、とんぼが音をたてていないが、

「秋の空をスイスイととんぼが飛んでゆく」

たとえばその状況の心持ちを表わそうとしていると考えられる。これは *sound* をそのままコトバで表わそうとしているのではなく、その状況を *imagine* する *state of mind* が写されていると考えられる。

このようにある種の単語の音声 *sound* とその意味 *meaning* との関係を調べてみるのが、この小論の主旨である。

2

chirr, chirp, chirp とか、*titter, giggle, tewitter, squeak* とかの諸語が大体何を表わしているかは容易に想像出来る。*sound* をコトバによって暗示している、いわゆる *echoic words* と見られる。

更に *flash, flare, flame, flicker, flimmer* の単語に共通する [fl-] の *sound* が「動く光」を暗示し、また [-eə] の *sound* が *blare, flare, glare, stare* の諸語に共通して「大きな音とか光」の意味をもち、*slime, slip, slush, slobber, slide, slither* の [sl-] の *sound* が「やわらかにぬれて」の意味を暗示するとみられなくもない。しかし、*air, pair, pare* などにみられる [-eə] が「大きな音とか光」とは関係がない。L. Bloomfield^① はこれらを語型式 *linguistic form* の強意型 *intense form* として、*symbolic form* と名づけ、その表現効果は直接的で、具体的であると思われるといっている。

このように単語の音声 *sound* とその意味 *meaning* との間には何か必然的な関係があるのではないか。

speech の分析としては、phonemics など取扱う問題はその学問にまかせ、意味のある言語型式としての単語の発音と語音 word sound とし、語音には高低、強弱、個人の声の調子などがあって、どんな場合でも常に同じではありえない。即ちその発声の仕方がさまざまあって、差異がある筈である。同一個人でも同じということはない。まして個人個人では明瞭な差異変化がある。しかるに実際個人同士に意志伝達 communication が行なわれうるのは何故であろうか。これは sound にはある範囲があって、その範囲内であれば、多少の差異はあっても他の sound と弁別されるという理由による。故に、語音は category であるといえる。

これは聴く側に立って、感覚の印象 sense impressions の class とか、group として理解するのが容易で、便利である。そして語音は時間空間の中で、あらゆる変化を通して同一性 identity を保持する連続体と規定し得よう。例えば book という sound は、人により、また同一人でも多少は違うが、他の sound と弁別できるのは、その category の essential features が反覆されているからと見られる。その上 nonessential な部分は偶発的 accidental で、人間はそうした些細な差異を無視できる能力がある。音波にしても非常に高く、また非常に低いものは知覚され得ない。ある範囲内の音だけが聞こえるようなものだ。これは思うに適応 adaptation の結果生じた習性かも知れない。

category にはそれを構成している属性 attribute がある。属性には、Aristotle も考えるように essential な、そして defining に関係しない種類がある。前にもふれたように、語音には個人により、また同一個人としても、その発声において差異があると考えるのが当然だが、essential attributes は再起 recurrence して、人間は経験して categorizing behavior をすることになる。結局 category を規定するものは、その規範性 criteriality であるといえる。これには眼前にあるもの、即ち actual criteriality と、そうでなく潜在的にあって、眼前にはないが、そうなる可能性のある potential criteriality の2つが考えられる。例えば、きりんの首の長さは他の動物から区別される criterial なものになり得るし、potentially にも、また actually にも、criteriality であるが、4本の脚をもつことは、criterial になり得ない attribute である。

コトバが stand for するもの、即ち被表示物 referent も語音と同じように単一のものでなく固有名詞 proper noun できえも、category である。語の reference 関係には、だから語音の category が被表示物 referents の category を refer to することになる。従って語音の category と被表示物 referent の category が同じような similar な attributes をもつことがありうる。

ここに語音 word sound と語義 word meaning の相似を想定する根拠がある。これを

Otto Jespersen は sound symbolism とよび、他の人は phonetic symbolism とよんでいる。

4

この問題について引き合いに出されるのは、Plato の *Kratylos*^② の対話中での Hermogenes の下記の会話である。

“I should explain to you, Socrates, that our friend Cratylus has been arguing about names; he says that they (=names) are natural and not conventional: not a part of the human voice which men agree to use; but there is a truth or correctness in them which is the same for Hellenes as barbarians” (Hellenes は Greek 人を指し、barbarians とは Greek 人以外の民族を指す) ここで、naming における correctness の2つの原理は譬喩 metaphor と音声の象徴 phonetic symbolism をいっているのだろう。name とは物の name であろうが、広く意味のある linguistic forms をいっているととれる。あらゆる言語においてすべての時と所とを通じて対応する被表示体 category をもつことは実際にはないことで、語音も変化し、語義も変化して行くというのが言語理解の上での常識である。

Jespersen はその *Language*^③ の中で、語音と語義との関係の問題は古来言語学の dilettantism の愛好するところであったと喝破している。しかし語音と語義との関係は science 科学として、すべてに通用する原則は立てられないが、趣味をもつ者にはおもしろい問題である。そしてそれはまず言語の起源の問題にも関係し、更に現在言語の機能にどんな役割を果しているか研究者としては軽視できぬことだと思われる。

かって我が国でも徳川末期^④ の国語学者、富樫広蔭、堀秀成などが音義説なるものを主張した。これは一種の語源論であって、五十音や伊呂波の各音に固有の意義が存在するとし、これを基礎として言語の意味や用法作用を説明した。例えば、

宥ウ 開けそむる象、溢れ出る象、動く象、伸びゆく象、大なる象。

於オ 判れ降る象、窄りたる象、暗き象、重き象、発り生る象。

のように、五十音の各音にそれぞれ上のような語義が含まれていると説くが、根拠がはっきりしていないので、堀秀成の独断に過ぎないと一般に考えられている。しかし現今発音の口頭作用から語義を理解しようとする学者の中にも堀秀成の主張に現代の心理学者の音声を研究するものに通ずるものがあって、すべて独断であると軽視できないものがある。

Rhetoric でいう Onomatopoeia 声喩法とよばれるものは prose にも見られるが特は poetic diction に多く見いだされる。即ち poetic diction においては meaning に応じて音声の響きの効果をあげるために言語の利用を工夫するのである。一部は rhythm を通じ、一部は語音を通す。このような音声 sound と文意の調和の問題は特に英詩の生命である。この現象と

効果はどの言語にも見られる。

Tennyson の *Morte D' Arthur* 中の一句は動作の slowness と reluctance を暗示している。

“So strode he back slow to the wounded king.”

この中 [str] と [sl] に注目せよ。

また Tennyson の *The Golden Year* 中の

“He spoke; and high above, I heard them blast The steep slate-quarr, and the great echo flap And buffet round the hills, from fluff to fluff.

詩句には重い響きが岩の間にこだましている。また *In memoriam* 中の次の一句は荒廃した心と荒れ狂った天気の状態を暗示している。

“He is not here: but far away The noise of life begins again, And ghostly thro' the drizzling rain On the bald street breaks the blank day.”

ひとり Tennyson に限らず、Edgar Allan Poe の *The Bells* を見ても、鐘の sound を vivid に describe している。

“Hear the sledges with the bells— Silver bells!

What a world of merriment their melody foretells!

How they tinkle, tinkle, tinkle,

In the icy air of night!

While the stars that oversprinkle

All the heavens, seem to twinkle

With a crystalline delight;

Keeping time, time, time,

In a sort of Runic rhyme,

To the tintinnabulation that so musically wells

From the bells; bells, bells,

Bells, bells, bells—

かねの sound の描写のよさは、prosody の十分な知識なくとも味わえる。さらに prose の 2、3 例をあげると、

“The water was boiling, and threw up a great fountain from its midst.” と、onomatopoetic word による。

“The spray was hisseng hot and a huge jet of water burst up prom its midst.” を比較するとよく分かる。

“He threw himself into the river”

よりも次の文がより virid である。

“He plunged into the river.”

“The horse rushed galloping down the road.”

の方が次の、

“The horse came quickly” よりも descriptive である。

5

語音と語義の関係の結びつきについて、

Ferdinand de Saussure[®] は *Cours de Linguistique Générale* の中で、言語記号の第一原理として “Le signe linguistique est arbitraire.” と断言している。また同様な意見を Leonard Bloomfield は *Language* の中で “—, but the connection of linguistic forms with their meaning is wholly arbitrary.” といっている。語音と語義の関係は恣意的な場合もあるが、しかしこれのみではなく、phonetic symbolism を考えさせる場合もあり、英語を味読するにはそうした理解が必要なのではなかろうか。

再び Jespersen の説をきいてみよう。彼は該博なヨーロッパ諸語の知識を使って論じているが、英語に関するものを引いてみよう。sound を直接写す場合は Echoism ともいわれる。各種の金属音をさすものとして、clink, clank, ting, tinkle. 水のだす音として、splash, bubble, sizz, sizzle. 物の出す音、bow, wow, bleat, roar: 人間の出す音、snort sneeze, snigger, smack, whisper, grunt, grumble. 正字法 Orthography の rule から、また正音法 Orthoepy の点から自然音を表わすに不完全なので、accidental なものが様式化する場合がある。鶏の鳴き声は、英語では、cock-a-doo-dle-doo となり、ドイツ語では kikeriki, フランス語では coquelico 綴られている。日本人には「コケッコウ」ときかれ、China では「東天紅」となるらしい。conrention が国語国語に特別に書き記るされている。したがって語音と語義との関係には universal principles がないことになる。彼は更に sound を出すものの例として cuckoo, peewee をあげている。cuckov も [kúku:] で、cut のように [u] が [A] に変化しないのは sound symbolism のためである。動きや、それが hearer に与える印象を表わす語に、水に関連して、bubble, splash など、動きの音に clash, crack, peck など。人間の動きの bang the door. tap または rap at the door. fl- や sl- の語、flow flag, flake flutter, flisker, fling flit. flurry, flirt, slide, slip, slive, glide. 形容詞となる、fleet slippery, glib. よたよた歩く、todder, dodder.

速い、うつ音を暗示する、pat, tap knock snap, snack (hurried meal) snatch, eateh, grip, tickle, titter など。light と dark に見られる、音の高低の自然な連想、[u] と [i] boom と gleam. 語音の長さや強さが語義の感情的効果を表わすもの、例えば、It's very cold. [ou] と [l] を長めに発音する。terribly dull. 米国人はフランス語の dieu に対して [goud] と言わないと dieu ではそれらしい感じが出ないらしい。Jeho-vah はすばらしく大

きく感ずる。

自然音はないが、そうした感じのするものに、日本語の、

「とんぼがすいすいととんで行く」

「目ばかりが、きらきら輝いていた」

「富士の峰がすっきりとそびえているのも…」

は、むしろ *state of mind* を暗示している。

このように言語における語音 *sound* と語義 *sense* の対応は、*sound symbolism* と呼ばれ *sound* 直接の *imitation* から始まって、人間の *emotion* をコトバによって暗示するまで広く適用され、その国語特有の表示法があって、*universal principle* はないが、言語の現象を調べる上に全く無視するわけには行かぬようだ。smallness を表わすのに母音の [i] が <top と tip, trip と troop, sin と sup, sop のように> 適切であるが、big, thin, thick は都合が悪い。音声上、また意味上、歴史的発展の結果、語形なり発音が変わってくるのは英語史の常識である。

sound symbolism の考えを言語の起源に結んだ説に *bow-wow theory* と戯称されている学説があるが、これも言語の発生の全部を説くのではなく、現在の英語なり、日本語を見ると現実に歴史の発展につれて *symbolic words* がますますふえて行くので、Jespersen も言っているように、語音と語義との結びつきは吾が国の遠い祖先が知っていたよりも現代にこそ密接であるということから提出されたものである。Jespersen は彼の該博なヨーロッパ諸語から実例をとりながら、このことは所詮は *linguistic dilettantism* といっているが、この問題について別な立場、つまり心理学的にとりくんだ傾向が見られる。

6

この主題を心理学的実験を通してすると、人為的な言語と自然言語に関するものに分けられる。心理学者達は、あの音の連続に対して、安当な *appropriate* な *name* を選ばせるとか実験者が暗示した意味に対して新語を見付け出させるとかいろいろ試みてみた。

人為的に作った語に対して意味を選ぶという実験で人為的な語としては、mel のように *consonant+vowel+consonant* の語型をこの実験の資料とする。この語型、mel に対しては、社会的に広く行なわれている *definition* の伝統的な *rule* がないので英語ではない。けれども mle とか、lme のように、英語の正字法 *orthography* や音韻論 *phonology* に反し発音もしにくい、melba, とか melville などの単語は伝統的な *syllable* であり、*meaning* はないわけではないが *nonsense syllable* とよぶ。即ちそれらは、人為的な *unfamiliar* な *word* である。mel は一方では、melady, melancholy を連想させる。しかし elm の順序に綴ると英語になる。

アメリカの人類学者であり、言語学者である Edward Sapir (1884~1939) は *phonetic*

symbolism について研究し、このような nonsense syllable を使って次のようにしている。英語を母国語としている人に向けて、mal と mil の syllable を示し、mal は大きい机を記号化し、mil は小さい机を記号化するとし、各々の場合どちらの syllable が妥当 appropriate しているかを被験者に決定させる。consonant は始めから最後までとし、中間に挿入される vowel だけが違うようにする。そうすると、被験者の決定をきめているものは、vowel であるはずである。Sapir は vowel を [a] から [i] まで挿入してみた。その上、syllable を使って consonant も対比してみた。被験者は約 500 人で、11 才から成人までの年齢の分布で、研究された音声の比較的な大きさ size の含みは印象的なほど広く被験者の判断が合致するのに気がついた。例えば、[a] と [i] の対比では被験者の 80% が [a] が [i] よりも大きいと断定して一致した。

1933 年に Stanley Newman は Sapir と同じような方針のもとで data を更に分析して、母音 vowel の大きさ magnitude は [i], [e], [ɛ], [æ], [a] の順になることに気付いた。この順序は口中での舌の位置が後退するのに比例する。そして vowel の magnitude は音響学 acoustics 上測定した声音的共鳴の振動数が徐々に減って行くことに比例し、その上発音の時に使用される口腔の形が増して行くことなどとも関連しているのを発見した。これらの data より [u], [o], [ɔ] は Sapir の研究した 5 つのものより大きいと判断された。

consonant についても、発声の位置で分類するのが phonetics 上習慣になっている。それらを列記してみると下記の如くである。alveolars とは上の歯のうしろの固い歯茎に舌の先をつけて発声する、[t], [d], [l], [n] などである。labials は [b], [p], [m] の類などで口唇を合せて発声する。Palatals は軟口蓋に舌の後部をあげて発声する [g], [k] などである。そして alveolar, labial, palatal は articulation の 3 つの位置の順で大きさ size は変ってゆく。英語では consonant は一対をなし、voiced, と voiceless で voiced consonant は常に voiceless consonant より大きく見えた。例えば、[d; t], [b; p], [g; k] のように。

Newman は音声を明暗の度合でも対比しうることを示した。この度合は大きさと対応した。vowel が大きくなると暗さを増し、Voiced Consonant は大きくて暗い。とにかく完全には相関関係は成立しなかったが明るさは大きさと結び、暗さは小ささと相関した。Consonants の間では発声の順序—alveolar, labial, palatal は暗さから明るさに平行したのである。

このような Sapir と Newman の発見は英語の god の発音でよく説明される。この語の音声だけで非常な大きさを暗示する。これは一つの後方 Vowel と二つの Consonants からできている。[gɔ: d] の発音は大きな敬虔さを表わし、[ɔ:] は暗くて大きい。だから信心深いアメリカ人にはフランス人の dieu は微弱で、[gɔ: d] の気分には不満足な者がある。一方 Jehovah の方は壮大な響きをする。

Onomatopoeia は既述したように、非言語的音響をコトバで模倣することで、これは ono-

matopoeia でなく、音声が空間的なものや視覚的なもの、大きさとか明るさを暗示するのみである。われわれが経験しているように、英詩では音声は往々意味を反映しているが、人によっては感覚が統一されているので、聞くことによって色彩を感じることすらある。これはいわゆる synesthesia 共感覚とよばれるものである。synesthesia は異例的な現象で誰でも経験するというものではない。共感覚をもっている人同志でもお互に意見が一致するとは限らない。舌を軽快に踊らすと果たしてその感じを反響させるであろうか。ピアノのハ長調は古い金属の音とか、若葉の音を感じさせるか。これらを考えても感覚間の結合はどうも疑わしくみえる。それで Sapir は私共の多くが妥当と考える実験を試みた。それは意味に新奇な語を組合せることである。いろいろな年代の数百人の被験者はその解答が一致した。これは被験者が英語使用の人たちであったため、皆が同じような類推によった理由によるのであろう。mal は大きく、mil は小さい。被験者が一致したのは同じ文化環境に生活していたためである。Jespersen がいみじくも喝破しているように、echoism またはそれに関する現象は、想像上の原始時代に遡るのではなく、現在の日常言語の中に作用している力によって招来されるのであって、すべての自然言語においてその活動は歴史とともに増大してきたように見える。

7

1954年にドイツの H. Wisseman[®] はどうして onomatopoeia の語ができるかを実験的に調べてみた。それは音を支えておいて妥当する語を選定させてみたのである。ある場合には、前もって並べておいた表から語を選択させた。別の場合には、被験者に思うまま数奇な語を作り出させた。どの場合も被験者は個人個人でテストをうけた。被験者が注意して聞いていると隣室で実験者が鎖とか、鍋とか、螺線のばねとい、櫛とかで色々な音をたてる。また水滴を落としたり、水のはいったびんをふったりして音を出してみる。vowels の順序ではほぼ Newman の結果と一致したのである。Wisseman のこの調査には面白いことが多くある。例えば、onomatopoeia の語の長さは、多音節の語は長い持続の音を表わすのであるから、音の持続に比例すると誰も推量するだろうが、事実はそうではなく、syllable の数は音の中で聞える分断 division の数と符合するのである。stress は音の中の高い分断、もしくは目ぼしい分断をはっきり強調するために使用される。

いきなり始まる音はふつう無音閉鎖子音 voiceless stop consonant [p], [t], [k] で始まる語が選ばれる。[p], [t], [k] が破裂音 plosive とよばれるのは、爆発的に発声されるので至極もつともである。ゆるやかに始まる音としては頭初に摩擦音 spirant, [s], [z] のような音が選ばれる。かく onomatopoeia の語の頭初の音声は被標示音のいわゆる刺激要素の段階 stimulus gradient を写している。被標示音 referent noise の音度 pitch—high, middle, low—や調子の色彩 tone color—bright, colorless, dark—を表わすのに母音 Vowel が使われていると大抵の被験者は合致している。これら二方面の度合いは完全に相関関係

にあって、high pitch は bright color に合っている。〔i〕,〔ü〕,〔ö〕は明るく高く、一方〔u〕,〔o〕は暗く低い。二方面では他の Vowels の中間になっている。

Wissemann の tone color についての発見は Newman の結果と一致した。しかし〔ö〕はアメリカの研究には入っていないということを忘れてはならない。そして彼は前方の〔i〕symbolic な位置づけについては、舌の位置が唇の形よりも重大な phonetic symbolism の発声上の決定要素であるとする論者の見解を支持している。円唇母音 rounded vowel は舌の後部で発声されると暗くて低い。舌の前部を使って発声されると明るく高い。

このような onomatopoeia の語の representational な性質にも拘らず、自然言語にある種の伝統的な面がある。大体に模倣的 imitative であるが、各国語の特異な表現形式がある。鶏の鳴声にしても各国語まちまちであることは既に述べた。Wissemann の被験者の多くはドイツ人であるから、ドイツ語の phonology や orthography に従っているが、音声の明暗ではアメリカ人と同じ原則によっているようである。Sapir でも Newman でも Wissemann でも〔i〕が無意味な綴りに現われる時には小さくて明るいという。Jespersen は前に述べたように、この vowel は自然言語では、意味的に連絡があって、小さく、弱く、早いと信じていた。英語では little, 独語では kleine, 仏語では petite, イタリア語では piccola, ラテン語では minor, ギリシャ語では mikros となり、日本語でも chiisai となる。英語でも diminutive (示小辞)を作るに、Bobby←Bof, birdie←bird の如く〔i〕を語尾につける。しかし Roget's Thesaurus を見ると、greatness, smallness, size, littleness の項にはこれに反する語が非常に多い。

S. Newman の方法を僅かに修正すれば、natural languages には母音 symbolism が存在するかどうかのテストに利用できる。英語単語が形 size の含みで妥当するかどうか。それには使用の頻度数 frequency のことも考慮する必要がある。Jean Berka 女史や Roger Brown 氏など種々操作してみたが、英語には母音 symbolism が存在しないのではないかとこの結果を得た。つまり音声 symbolism はもともと偶発的であり、現在英語を話す人にとって自然に感じられる語義と語音の相関関係は後天的な言語訓練の結果であろうと主張するのである。しかし印度欧州語族 Indo-European family と歴史的になんの関係もない言語にも語音と語義にある同じ相関関係があるとすれば、この相関関係は人類にとって共通した現象のように考えられる。

Richard Paget[®] はその著 *Human speech, New york*, (1930) で説を立てて、phonetic symbolism の根柢は外界の motion とか contour 輪郭を模倣するために、発音器官を動かす能力であるとする。彼によると communication は原始生活の基本的行動を represent する全身的 gesture の体系として始められた。発音に要する筋肉はこうした gesture を小さくして模倣した。このような筋肉の運動に音声加わって、意味のある発声生まれる。その意味のある発声で筋肉の運動が意味を表わした。厳格にいうと、paget の説では音声それぞれ自体

意味を模倣するのではなく、音声はただ模倣的な gesture によって生まれるのであるに過ぎないということになる。Oho と i-i は英語の large と small に対する原始 Polynesia 語であるが、それが妥当であるのは音声の性質ではなく、発声の際の口形が大きいか、または小さいかのためであるとする。Paget は Canton 方言辞書を初めて一覽しただけで150語の gesture 語を弁別した。その上近代英語で sp で始まる 99の単音節 monosyllable を点検してみても、そのうち81% gesture に妥当する意味をもっていると気づいた。また、Indo-European 語源や、Semitic 語や Sumerian 語、古代漢語、Oceania, 南北アメリカの諸言語に多数の gesture symbolism をもつ語を見出した。

しかし Paget の説を読んでゆくと、なんだか不信が強くなっていく。それは、その是非を Paget 一人が決めてゆくという理由による。従って彼の説を信じない他の人は必ずしも彼に同意するわけにはいかないのである。

8

その他 2、3 の心理学的実験者が色々の方面から実験的に研究したが、自然言語の場合 phonetic symbolism はどうなっているのだろうか、語音と語義の相関関係はどの言語にも存在するという充分な証明はなされていない。

Jaspersen のあげた例はもっとものようであるが、その選択の方法が計画的でないし、その結果の処理についても統計的ではない。Newman が試みた英語の母音 symbolism の注意深い詮索は証明の規範に合っているが、その結果は否定的であった。Berko と R. Brown がした同じ問題の研究も英語の母音 symbolism の存在に否定的に終わった。しかし Jaspersen のような大学者の洞察は無視できないものである。またある言語を日常語として話している大抵の人々が未知の発音の綴字に対して同じような symbolism の意味をつけるのは、S. Tsuru や Brown や Black と Horowitz の研究で明らかにされている。このことは語音と語義の相関関係は同一社会に属する人々の間の appropriateness と inappropriateness の問題だけにすぎないと考えざるを得ない。従って英語における語意と語義との相関関係は英語を常用する国家では、ある種の共通した英語的知識があるために成立すると思われる。文化的所産としての語音と語義の相関関係には、英語は英語として、フランス語はフランス語として各国語に一定の rule があるといえよう。そして更に人間全体に通ずる Phonetic symbolism が考えられ、そのことは想像を出ない言語の起源の問題を解く手がかりになる Bow-wow 説とか、Lling-dong 説に新しい根拠を与えることになるろう。

ある論者は、ことに E. L. Thorndike は当初に文字記号 symbol に恣意的に meaning があてはめられ、手あたり次第は声を出して Contiguity とか reinforcement とかの学習の法則が行なわれて、特別の音声が残続し、社会的に拡まったと考えた。そして原始の言語は原始

の文字のように representational であったと推定されるとするのである。そして representational の段階がかなり長く続いたと思える。こうした representation の時期の一つに imitation があったと説く。また onomatopoeic 説の論者は音声は非音声の外界の音を暗示できるという。gesture でできると説く Paget や Wundt は発声器官は外界の動きや輪郭が模倣できると主張する。別の説は人類の intersensory connections は音声は必然的に他の感覚の経験に結ばれているとする。いわゆる synesthesia を説く。

こうした諸説の中で、最近の言語心理学者 Samuel Reiss の association をもとにしたの見方は面白いので、他日稿をあらためて紹介しよう。

- ① L. Bloomfield, *Language*,
- ② B. Fowett (ed.) *The Dialogues of Plato*, vol. 1, p. 253~389.
- ③ O. Jespersen, *Language*, p. 398.
- ④ 保科孝一、新体国語学史、p. 186以下。
- ⑤ J. de Saussure, *Cours de Linguistique generale*, p. 120.
- ⑥ E. Sapir, *a Study in Phonetic Symbolism*. (*Journal of Experimental Psychology*, 12, 1927.)
- ⑦ S. Hewman, *Further Experimentals in Phoctic Symbolsm*, (*American Journal of Bsycho logy*, 45, 1933.)
- ⑧ H. Wissemann, *Untersuchugen zur Onomatopoiic* (1954).
- ⑨ R. Papet, *Human Speeh* (1930).